TADOKU JUNIOR　ピノッキオの冒険　★★★☆☆ ふつう　437語

Pinocchio, Chapter 6

第6章　もえてしまった足

Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)（1883年の本）　原文そのまま　朗読：Mark F. Smith

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　かみなりの夜、パンをもらいに村へ出かけたピノッキオ。ところが、びしょぬれで帰ってきて、ねむっているあいだにたいへんなことが……。



Pinocchio falls asleep with his feet on a foot warmer, and awakens the next day with his feet all burned off.

Pinocchio hated the dark street, but he was so hungry that, in spite of it, he ran out of the house. The night was pitch black. It thundered, and bright flashes of lightning now and again shot across the sky, turning it into a sea of fire. An angry wind blew cold and raised dense clouds of dust, while the trees shook and moaned in a weird way.

Pinocchio was greatly afraid of thunder and lightning, but the hunger he felt was far greater than his fear. In a dozen leaps and bounds, he came to the village, tired out, puffing like a whale, and with tongue hanging.

The whole village was dark and deserted. The stores were closed, the doors, the windows. In the streets, not even a dog could be seen. It seemed the Village of the Dead.

Pinocchio, in desperation, ran up to a doorway, threw himself upon the bell, and pulled it wildly, saying to himself: “Someone will surely answer that!”

He was right. An old man in a nightcap opened the window and looked out. He called down angrily:

“What do you want at this hour of night?”

“Will you be good enough to give me a bit of bread? I am hungry.”

“Wait a minute and I’ll come right back,” answered the old fellow, thinking he had to deal with one of those boys who love to roam around at night ringing people’s bells while they are peacefully asleep.

After a minute or two, the same voice cried:

“Get under the window and hold out your hat!”

Pinocchio had no hat, but he managed to get under the window just in time to feel a shower of ice-cold water pour down on his poor wooden head, his shoulders, and over his whole body.

He returned home as wet as a rag, and tired out from weariness and hunger.

As he no longer had any strength left with which to stand, he sat down on a little stool and put his two feet on the stove to dry them.

There he fell asleep, and while he slept, his wooden feet began to burn. Slowly, very slowly, they blackened and turned to ashes.

Pinocchio snored away happily as if his feet were not his own. At dawn he opened his eyes just as a loud knocking sounded at the door.

“Who is it?” he called, yawning and rubbing his eyes.

“It is I,” answered a voice.

It was the voice of Geppetto.

ピノッキオは足あたための火ばちに足をのせたままねむってしまい、つぎの日目をさますと、足がすっかりもえてなくなっていました。

ピノッキオは暗い通りが大きらいでしたが、おなかがすいてたまらなかったので、それでも家を飛び出していきました。夜は真っ暗でした。かみなりが鳴り、ときどきまぶしいいなずまが空を走って、空を火の海のようにしました。おこったような風が冷たくふきつけ、もうもうと砂ぼこりをまき上げ、木々は気味悪くゆれてうめいていました。

ピノッキオはかみなりやいなずまがとてもこわかったのですが、こわさよりも、おなかのすき方のほうがずっと大きかったのです。ぴょんぴょんと十いくつかとびはねて村に着いたときには、くたくたで、クジラのようにハアハアいって、舌をだらりと出していました。

村じゅうが真っ暗で、人っ子ひとりいませんでした。店はしまり、戸も窓もしまっていました。通りには、犬一ぴき見あたりません。まるで、だれも生きていない村のようでした。

ピノッキオはやけになって、ある家の戸口にかけより、よびりんに飛びついて、めちゃくちゃに引っぱりながら、ひとりごとを言いました。「これならきっとだれか出てくるぞ！」

そのとおりでした。ナイトキャップをかぶったおじいさんが窓を開けて、顔を出しました。おじいさんは下に向かっておこってどなりました。

「こんな夜ふけに何の用だ？」

「すみませんが、パンを少しくださいませんか？おなかがすいているんです。」

「ちょっと待っていなさい。すぐもどってくるから」とおじいさんは答えました。夜中にうろつき回って、ぐっすりねている人の家のよびりんを鳴らすのが好きな、あのいたずらっ子のひとりだと思ったのです。

一、二分すると、同じ声がさけびました。

「窓の下に来て、ぼうしを広げてごらん！」

ピノッキオはぼうしを持っていませんでしたが、なんとか窓の下にかけつけました。ちょうどそのとき、氷のように冷たい水がザーッとふってきて、かわいそうな木の頭も、かたも、体じゅうもびしょぬれになりました。

ピノッキオはぞうきんのようにぬれて、つかれとおなかのすいたので、くたくたになって家に帰りました。

もう立っている力もなかったので、小さないすにすわって、両足を火ばちにのせてかわかそうとしました。

そこでねむってしまい、ねむっているあいだに、木の足がもえはじめました。ゆっくり、とてもゆっくりと、足は黒くこげて、灰になっていきました。

ピノッキオは、まるで自分の足ではないかのように、気持ちよさそうにいびきをかいていました。夜明けに目を開けると、ちょうど戸をドンドンとたたく大きな音がしました。

「だれ？」とピノッキオは、あくびをして目をこすりながら声をかけました。

「わしだよ」と声が答えました。

それは、ゼペットさんの声でした。

たんご と クイズ　第6章　もえてしまった足

lightning いなずま	**whale** クジラ	**village** 村
bell よびりん	**nightcap** ナイトキャップ（ねるときのぼうし）	**hat** ぼうし
stove 火ばち・ストーブ	**ashes** 灰	

Q1 ピノッキオがよびりんを鳴らすと、おじいさんは何をした？

① パンをくれた　② 冷たい水をかけた　③ 家に入れてくれた

Q2 ピノッキオは足をどこにのせてねむってしまった？

① まくら　② テーブル　③ 火ばち

Q3 朝、戸をたたいたのはだれ？

① ゼペットさん　② 憲兵　③ コオロギ

こたえ

Q1　②　いたずらっ子だと思ったおじいさんは、窓から氷のように冷たい水をかけました。ピノッキオはびしょぬれになりました。

Q2　③　ぬれた足をかわかそうと火ばちにのせたまま、ねむってしまいました。そのあいだに木の足がもえてしまったのです。

Q3　①　「わしだよ」と答えたのは、ゼペットさんの声でした。ろうやから帰ってきたのです。

原田英語の多読ベストジュニア
本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。
haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #500（Carlo Collodi (tr. Carol Della Chiesa, 1909)、1883年）。パブリックドメイン。
挿絵：この本には挿絵がないため、場面をイメージして AI（Codex）で描いた絵です。
朗読（Web版）：Mark F. Smith（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは 3 重チェック。人の目でも順次確認しています。